

論文

成人看護学実習の「慢性の病気をもって生きる」ことについての学び

藤堂 由里 (岡山県立大学保健福祉学部看護学科)

住吉 和子 (岡山県立大学保健福祉学部看護学科)

要旨：本研究の目的は、成人看護学実習（慢性期）（以下、実習）終了後の「慢性の病気をもって生きる」ことについての学びと、学びに影響する要因を明らかにすることである。

対象は実習を履修した40名のうち、研究協力が得られた36名(90%)の実習レポートであり、その内容を質的帰納的に分析した。本学の倫理委員会承認後に学生の了解を得たうえで実施した(承認番号22-36)。その結果、【看護過程の展開の実際】【看護の実際】【患者の理解】【退院後の生活の支援】【セルフマネジメント支援】【慢性の病気の影響】【患者の支え】の7つのカテゴリーが抽出された。実習の学びに良い影響があると学生が認識した要因は、受け持ち患者、他領域の実習の順に多く、講義の影響は最も少なかった。

キーワード：成人看護学実習（慢性期）、慢性疾患看護、学生の学び

1. はじめに

医療体制の充実、栄養の改善、疾病構造の変化による高齢化がもたらされ、医療は高度化、多様化している。高齢化の進展に伴い、がんや糖尿病、高血圧疾患などの慢性疾患を持つ人がますます増加していくことが予測されている。日本では、2016年における総死亡数のうち約82%は、非感染性疾患であるNCDs（Noncommunicable diseases）によるもので喫緊の課題となっている（World Health Organization、2018）。NCDsに対して日本では、国民健康づくり対策として1978年から10年ごとに取り組みがなされ（Japan Health Policy NOW、2021）、健康日本21（第二次）において健康の増進に関する基本的な方向として、生活習慣病の発症予防と重症化予防の徹底（NCDsの予防）があげられ、今後も重点的に取り組んでいくことが述べられている

（厚生労働省、2022）。

看護基礎教育をめぐる現状と課題については、対象の多様なスタイルや文化等を理解することが求められている。対応する対象や疾患の多様性や複雑性が増しており、高い能力が求められているにもかかわらず、若い世代においては住環境の変化や科学技術の進歩等により、人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでおり、看護を行うための信頼関係の構築や住環境課題の把握が難しい現状が報告されている（文部科学省、2017）。そのため、基礎教育では教員の丁寧な関わりが従来以上に必要であるが、多様化する学生に合わせた教育が困難な現状があり、卒業後の臨床現場に影響を及ぼしている。原らは、急性期病院看護師が患者の退院後の生活を見据えた看護実践について、退院後の生活状況の予測や、短期間での多職種と連携、患者・家族・医療者間の認識

や理解の統一の実践に困難を感じている(原他、2022)。こうした中で看護学教育モデル・コア・カリキュラムでは、疾病を持ちながら生きる人やその家族の思いや生活、治療課程を理解し、セルフケアを伴う社会生活を支える看護実践を学ぶことが慢性期にある人々に対する看護実践のねらいとされている(厚生労働省、2019)。実習の学びに関する先行研究では、看護実践から学生が最も力を注いだテーマについて(寺田他、2017)、透析センターにおいて透析患者の制限や苦痛の過酷さの実感から尊敬に至った患者理解、セルフケア支援や支援体制について(岡部他、2016)、受け持ち患者の実践を通して(山口他、2018)、エンゼルケアの見学を通して(上田他、2019)や腎センター実習で患者とのコミュニケーションによる心理、日常生活、セルフケア能力について患者理解、患者の捉え方(島村他、1999)が報告されている。周手術期を中心とした成人看護学実習では、主に周手術期の病棟で実習をした学生の学びは、退院指導と清潔ケアの学び、退院指導での教育的かかわりの必要性や多職種連携の重要性を学べていたことが報告されている(茂木、2023)。しかし、急性期病院で行う慢性期看護学実習の学びについての報告は少ない。そこで今回は、実習終了時のレポートから急性期病院の慢性期疾患の病棟で実施した成人看護学実習の学生の学びと、アンケートから学びに影響したと学生が認識した要因について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象者及び研究依頼

調査対象者は、2021年度～2022年度にかけて岡山県立大学看護学科3年後期と4年

前期に実習を履修した学生40名である。本学では、実習において、「慢性の病気をもって生きる」成人期の人を全人的にとらえ、生物医学的な理解を深め、「その人の病気に伴う体験」を理解し、病とともに生きる方策を発見することを目的としている。実習目標は、1)看護上の問題の根拠を明らかにすること、2)優先度を決めて看護計画を実施できる、3)セルフケアを自ら発展できる援助方法の実施、4)専門的な知識・技術の提供、5)病いとともに生きる方策を考える、6)医療システムの中で看護の専門性と役割の理解をあげている(表1)。実習は急性期病院の病棟で3週間行い、実習最終日に、「慢性の病気をもって生きる」ことについて意見、学びを2000字程度のレポート(以下：実習レポート)を提出している。

対象者には、本研究のためにMicrosoft Teamsで説明書と依頼を行い、再提出されたレポートを対象とした。実習についての影響要因についてはMicrosoft Teamsでの調査を票送した。

倫理的配慮として、本学の倫理委員会の承認後に、Microsoft Teamsで説明書、同意書を提示し無記名調査であること、自由意思による参加であること、協力の有無は成績に影響せず、一旦了承した後に協力を取り消しても不利益はないことを説明をした。レポートの再提出と学びに影響する要因についてアンケートの回答をもって研究協力に同意が得られたものとした。

2.2 データ収集期間

2022年8月8日～8月31日であった。

2.3 調査内容

実習レポートから、学生が実習を通して「慢性の病気をもって生きる」患者につい

て抜粋した。実習の学びに影響を及ぼした要因については、Microsoft Teams にアンケートを作成し、グループダイナミクス、受け持ち患者、実習指導者、看護師、担当教員、講義、他領域の実習の7項目について提示し、項目ごとに、「良い影響があった」～「悪い影響があった」まで5段階で評価し入力してもらった。

2.4 データ収集方法

実習レポートの電子データを研究協力の同意が得られた学生から研究者にメール添付し研究対象とした。電子データの提出ができない場合は、実習レポートをスキャンしデータに変換し、研究対象とした。アンケートについては、Microsoft Teams にアンケートを作成し、無記名で答えられるよう設定し、入力してもらった。

2.5 データ分析方法

実習レポートの記述内容を繰り返し読み、実習において「慢性の病気をもって生きる」患者について理解したこと、「慢性の病気をもって生きる」ための看護について学生が知り得たこと、感じたこと、身についたと思う知識や技術など記述している学びの内容をデータとして抽出し、学びの内容を1単位としてコードをつけた。さらに各コードから意味内容の類似のコードを集めて、サブカテゴリー化し、サブカテゴリーの類似性に着目して、カテゴリー化した。分析過程では、研究者2名で内容を検討した。アンケートは、要因別に単純集計とした。

3. 結果

3.1 実習レポートの結果

研究協力を依頼し同意が得られたのは36名(90%)であった。分析対象とした実習レポートの記述内容は、350コードに分

割できた。そのうち抽象度が高く、意味不明な記述を除いた335コードを分析データとした。実習レポートから、「慢性の病気をもって生きる」ことの学びについて、31サブカテゴリーが抽出され、7カテゴリーに集約された(表2)。その具体的内容について記述する。以下、【 】はカテゴリー、< >はサブカテゴリー、「 」はコードを示す。

3.1.1 看護過程の展開の実際

【看護過程の展開の実際】では、「生じている現状の理解が不可欠で、看護の提供には豊富な知識と経験が重要である。」こと、「生活の背景や疾病に対する捉え方・自身の健康管理、強みや問題点、1人1人に適した目標の立て方など学んだ。」のコードが含まれ、<慢性疾患患者の看護過程の展開を経験し、知識、技術を統合し看護実践への適用>する内容は、患者を主体とし今までの療養行動を生かした看護過程の展開であった。また、「2人の受け持ち患者は疾患についての受け止め方や管理方法、生活をする場所、生活のスタイルなど人それぞれである事柄は多い。」のコードは、<受け持ち患者を複数持つことで1人1人違う看護の実際>の個別性が書かれていた。

3.1.2 看護の実際

【看護の実際】は、「完治が難しい慢性期において重要なのは、これ以上症状を進行させないことと合併症を発症させないことである。」という<慢性疾患の特徴を踏まえた看護>があげられ、「入院期間が短縮されている中で退院後を見据えた介入を行うことは難しい。」というコードは<慢性疾患患者のケア、介入の実際>であった。

3.1.3 患者の理解

【患者の理解】は、「患者のよき理解者

となるために共感的態度、受容的態度で接する。」ことや「病気に伴う体験で不安を傾聴・理解し、解決志向アプローチをし不安を軽減させられる看護を行う。」という＜患者を理解し安心できる関り＞の内容であった。＜生活者として患者の変化のプロセスを理解する＞内容には、「慢性疾患を持つ人々は、生活習慣や価値観、健康管理など十人十色であるが、日常生活を送るうえで何らかの制限を受けるという点が共通している。」という患者が日常生活への制限を受けながら生活することがあげられていた。

3.1.4 退院後の生活の支援

【退院後の生活の支援】は、「多職種での連携を図り、少しでも患者の希望に近づけられるように考えて関わっていく。」という＜病院間の連携、病棟と外来、多職種連携により退院後の生活の支援＞や、「患者のみならず家族にも焦点を当てて、家族の負担や家族の葛藤への介入も看護師の重要な役割である。」など、＜患者の健康状態、日常生活の変化に伴う家族の負担、対処、適応への支援＞の内容であった。

3.1.5 セルフマネジメント支援

【セルフマネジメント支援】は、「受け止め方を理解し、望む過ごし方を知り看護する。」という＜患者の思い、希望を尊重し望む生き方の実現の支援＞や、「患者の価値観の理解ないケアの提供は、押し付けになり、患者の望む生活を阻害する。」という＜患者の生活、価値観をもとにした自己管理の支援＞があげられた。「強みや退院後の希望を踏まえ自己管理方法を話し合っただけで決定することで、治療意欲を高め、継続的な自己管理ができるように工夫する。」という＜患者に寄り添い、強みを生かした支援＞の内容

もあげられた。一方、「患者が、病気とともに生きた自身の人生の捉え方が少しでもポジティブなものになるよう、看護展開をしていく。」という＜自己効力感を高め、ポジティブに取り組める支援＞や、「対話を通して相手を知り、納得できるように目標や内容について共に考えることが、健康管理を支援するために大切である。」という＜患者は看護師と病気と共に生きる方策を考える支援＞の内容があげられた。

3.1.6 慢性の病気の影響

【慢性の病気の影響】は、「病気と付き合いながら生活していくことで、病気になった意味を見出せ、人生を通じてあらゆる変容がもたらされる。」という＜慢性の病気が患者に変容をもたらし影響＞があげられた。

3.1.7 患者の支え

【患者の支え】は、『「慢性の病気をもって生きる」事とは人生そのものであり、病気自体が人生の一部となる。』という＜病気は、患者の人生や生活の一部となること＞や、「家族や看護師など弱音を吐ける存在が身近にいることが患者の精神面を保つ。」という＜患者の周囲、家族による支え＞があげられた。「集団指導は、共に頑張ろうという心の支えにつながるという利点がある。」という＜同じ疾患の患者同士の支え＞が含まれた。

3.2 実習の学びに影響したと学生が認識した要因

アンケートの回収率は、90%であり、36名の回答を得た(表3)。実習の学びに「良い影響があった」と答えた者が多い順に、「受け持ち患者」31名(86.1%)、「他領域の実習」30名(83.3%)、「実習指導者」24名

(66.7%)、「担当教員」21名(58.3%)が、「グループダイナミクス」17名(47.2%)、「講義」11名(30.6%)であった。

4. 考察

4.1 実習の学びの現状

学生は3週間の実習で、「慢性の病気をもって生きる」ことについて、【看護過程の展開の実際】【看護の実際】【患者の理解】【退院後の生活の支援】【セルフマネジメント支援】【慢性の病気の影響】【患者の支え】を学んでいた。学びの内容は、受け持ち患者との会話を通して患者が病と生きる経験を実感として学び、この実感が患者の回復のために努力したいという学習意欲につながっていると考えられる。吉原らは、ライフストーリーを高齢者が語る意義と援助者が聞く意義としての学生の学びは、高齢者を理解し、それを援助に生かすことができることだとしている(吉原ら、2021)。看護過程を用いて具体的な支援を計画する過程で、受け持ち患者の理解のために豊富な知識が必要であることを改めて意識し、既習の学習を復習するなど患者に必要な支援を立案するための学習に取り組んでいた。さらに立案した看護計画を実践するために、カンファレンスで検討する、患者の意向を確認する、看護師や教員と相談をする、看護師の実践を見学することにより、計画を実践するための根拠の必要性を学んでいた。【患者の理解】では、患者が生活者として生活習慣や生活背景は理解できていたが、生活の中での楽しみという視点の内容は見られなかった。実習で学生が自分で体験することにより、実感として学びを確かなものにしており、学習への動機づけになっていた。学生は、「実際に

患者の言葉で思いを知ることではわからないような思いを知ることができた。」と患者との会話から「患者の言葉から思いを理解」>することを実感し【患者の理解】につながっている。そして看護援助を実践する際には、「状況下で治療目的や生活上の工夫、注意点を伝えることと、実施・継続することは大きく異なる。」と、【看護過程の展開の実際】の体験から、個別性のある介入の必要性と、介入の評価の重要性について学ぶことができています。馬場らは、実習中の学生の動機づけと影響要因について、学生は、患者との関わりから患者の苦痛や思いに気づき、何とかしたい思いが援助を考える探求心への原動力となり、そして、援助の遂行後の患者の反応から成果の実感を得て、この嬉しさが次の援助への意欲につながっていた(馬場ら、2022)と述べている。

さらに学生は、「ケアは主訴から選択し、リスクに注意を払いながら実施することで、安全安楽なケアが提供できる。」と慢性疾患患者のケア、介入の実際>から、自分が何らかの支援において実践することに責任を感じ、安全、安楽に実践するための準備や練習、実践後の患者の反応を見ることや評価の必要性に繋がっていた。

2020年からのコロナ禍や入院期間の短縮により、急性期の患者中心の入院医療の中での慢性期看護の実習であるため、慢性疾患を持ちながら急性増悪した患者が受け持ち患者である現状であるため、患者教育を行う期間は限られている状況であったが、入院時から退院後を見据えて継続して慢性疾患看護を捉えることができていた。これは、実習病院の病棟でも定期的な退院前カ

ンファレンスや、他職種との連携を行われていたことも影響していると考えられる。

学生は、患者と関わり対話することで気持ちや不安、希望などイメージできていなかった面を知り、患者の全体像を描いていた。また、指導者と学生が、経験についてディスカッションをすることで場面の状況や環境、自己の言動が適切であったか、自己の感情はどうであったかなどリフレクションしている。杉森は、経験は、知覚による客観の認識と規定すると、体験は個々の主観に属し、客観性に乏しく知性による加工、普遍化を経ていない。まさに看護学における実習という授業展開は、体験を経験とする学習場面として極めて重要な意味を持つと述べている（杉森、1999）。

学生の体験は、学生自身が意識化してその意味を見いだせなければ学びには繋がらない。したがって、看護実践のリフレクションと看護行為の意味づけを行うためには、教員が学生の気づきを引出し、ともに学習を進めていくスキルが必要である（深田ら、2015）。体験を意識化するために、実習中は学生カンファレンスを毎日行い、教員は意識して関わっているが、グループダイナミクスが生かしきれていない現状がある。その理由として、コロナ禍の影響でオンライン授業が多く、大学生活での学生間の交流が少なかったこと、授業でグループワークは多く取り入れられているがコロナ禍のため機会が少なかったことが考えられる。山田らは、領域実習では多くの学生が固定グループ形態による実習授業でグループダイナミクスのみでなく、自己への学習効果も認められ（山田他、2016）、実習でグループダイナミクスが生かせるよう最近の学

生の特性を考慮して、入学当初から育成していく必要がある。

4.2 実習の課題

学生は、患者を生活者として日常生活への制限やマイナスの影響は捉えられているが、実習の課題として、療養生活の中でも患者の生活の楽しみというプラス面を捉えることが難しい状況がある。舟島は、看護学生が「生活者」として患者を捉えるためには、患者がこれまでの生活背景や価値観、その人の大切にしている思いや言動の意味を受け入れて患者の言動の意味を受け入れて患者の言動の背景を知ることが重要であると述べている（舟島、2021）。菊池と若澤は、看護学生が患者の生活背景や生きてきた個の歴史の中で培われたその人らしい生活スタイルや多様な価値観を持った「生活者」として理解をすることは、限られた実習期間の中では容易ではないと述べている（菊池他、2021）。したがって生活体験が少なく人間関係が希薄な学生の特性に合わせた教育方法の開発が必要である。

4.3 実習の学びに影響したと学生が認識した要因

アンケートから30名（83%）の学生が他領域の実習から実習の学びによい影響があったと認識したことについて考察する。領域別看護学実習の経験の積み重ねにより、実習で試行錯誤を繰り返す中で、患者中心の思考へ転換し、援助を見出す考え方を掴み、患者把握のスキルを上げ、自分の努力すべき方向が自分で見つけられる考え方を獲得し、内省を繰り返し臨床判断の拠り所となる考え方を自分のものにする（岡田、2020）。このことは、学生は既習の知識と他領域の実習での経験から得られた臨床判断

の拠り所となる考え方をもとに適用し適応させている。つまり、学生の経験や内省から発展させた考えや実践を生かした指導が学生の成長を促すことにつながると考えられる。

5. 結論

急性期病院での成人看護学実習(慢性期)終了後の学生の学びは、【看護過程の展開の実際】、【看護の実際】、【患者の理解】、【退院後の生活の支援】、【セルフマネジメント支援】、【慢性の病気の影響】、【患者の支え】の7つのカテゴリーが抽出された。実習目標の患者の理解と支援はおおむね達成されていたが、病とともに生きる方策の発見および医療システムの中での看護職の専門性については、課題が残された。

実習の学びに影響する要因として、他領域の実習が83%と多いことから、教員間の領域間の学びの共有が学生の成長を促す可能性があると示唆された。

6. 研究の限界と課題

本研究は、実習終了後のレポートから学生の学びを抽出したため、学生の印象に残っていることが記述されているという偏りがある。また、実習全体の学びであるため学生の実体験としての学びについて明確にできていない限界がある。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究への参加を快く承諾し、ご協力くださいました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

馬場美幸、小松万喜子(2021) 基礎看護学

実習にのぞむ学生の動機づけと影響要因、愛知県立大学看護学部紀要 27 : 33 - 44.

原裕子、辻あさみ(2022)急性期病院看護師の患者の退院後の生活を見据えた看護実践に関する認識の現状と課題. 日本慢性看護学会誌、16 : 35 - 43.

深田あさみ、新橋澄子、下高原理恵、峰和治、李慧瑛、緒方重光(2015)学生のリフレクションを促す経験型実習、鹿児島大学医学部保健学科紀要、25(1) : 11 - 18.

舟島をなみ(2020)看護学教育における授業展開 - 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて -、医学書院.

Japan Health Policy NOW : 非感染性疾患(NCDs).<https://japanhpn.org/ja/ncds/>、2021. (2023. 10. 16 確認)

菊池真弓、若澤弥生(2021)臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する文献検討、了徳寺大学研究紀要、16 : 285 - 296.

厚生労働省 : 看護基礎教育検討会 報告書. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html 2019. (2023. 10. 16 確認)

厚生労働省 : 健康日本21(第二次)最終評価報告書 概要. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_28410.html、2022. (2023. 10. 16 確認)

松尾睦、築部卓郎(2023)看護師・医師を育てる経験学習支援、第1版、医学書院.
茂木英美子、川久保和子、渡邊佳奈、藤田裕子、佐藤栄子、青山みどり(2023)成人看護学実習I(急性期・回復期)における学生の学び、足利大学看護学科紀要、

- 11 (1) : 29 - 38.
- 岡部春香、庄村雅子、岩本敏志、大山太
(2016) 成人看護学実習における慢性期
にある人々の看護に関する学生の学び -
透析センター実習記録の分析から -、東
海大学健康科学部紀要、22 : 9 - 15.
- 岡田摩里 (2020) 領域別看護学実習の経験
の積み重ねにより臨床判断に必要な思考
方法を学生が獲得していくプロセス、日
本看護学教育学会誌、29(3)、1 - 13.
- 島村美穂子、鳴海喜代子、渋谷えり子、中
澤容子、會田みゆき、中村織恵 (1999)
看護学生の慢性疾患患者理解の傾向につ
いて(第1報) - 腎センター実習における
実習記録の分析から -、埼玉県立大学短
期大学部紀要、1 : 37 - 45.
- 杉森みど里 (1999)、看護教育学、第3
版、医学書院.
- 寺田智美、棚橋泰之 (2014) 成人看護学慢
性期実習における学生の学び、神奈川歯
科大学短期大学部紀要、1 : 57 - 63.
- 上田伊津代、山口昌子、池田敬子、川井美緒、
辻あさみ、山本径代、鈴木幸子 (2019) 慢
性期看護実習においてエンゼルケアを見
学した学生の学び - 実習記録と質問紙調
査の分析から -、和歌山県立医科大学保健
看護学部紀要、15 : 21 - 30.
- World Health Organization:
Noncommunicable diseases country
profiles 2018.
<https://www.who.int/publications/i/item/9789241514620>, 2018. (2023. 10. 16 確認)
- 山田 亜美、小田 朋子、松本 文美、處 千
恵美 (2016) 領域別看護学実習における
グループ学習の形態が学生におよぼす影
響について(第1報)固定グループで実習
をした学生を対象に、三育学院大学紀要
8 (1) : 17 - 26.
- 山口昌子、上田伊津代、辻あさみ、川井美
緒、池田敬子、宮嶋正子、鈴木幸子 (2018)
慢性期看護実習における受け持ち患者を
通した学生の学び - 実習レポートの分析
から -、和歌山県立医科大学保健看護学
部紀要、14 : 19 - 25.
- 吉原悦子、丸山泰子、金子由里、溝部昌子
(2021) 老年看護学実習においてライフ
ストーリーを聞くことによる学生の学
び、西南女学院大学紀要 25 : 13 - 21.

表1 成人看護学実習（慢性期）の目的・目標

目的	慢性の病気をもって生きる、成人期の人を全人的にとらえ、生物医学的な理解を深め、「その人の病気に伴う体験」を理解し、病とともに生きる方策を発見することを目的とする。
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 慢性疾患を持つその人の身体的・心理的・社会的側面をアセスメントして、ウェルネスを含めた看護上の問題を導き出し、その根拠を明確にすることができる。 2) 看護上の問題を解決するうえでは、その人（家族）の治療上・療養上の目標を長期的展望にたってとらえ、多面的に検討し、看護計画を立て、さらに優先度を決めて実施することができる。 3) 慢性疾患を持って生きてきた過程を踏まえて、必要な治療・セルフケアを含む、その人固有のセルフケアを自ら発展できるような援助方法を計画・実施することができる。 4) 慢性疾患を持つ人とその家族の権利としての自己決定を支援するために必要な専門的知識・技術を提供し、個別的な援助を行うことができる。 5) その人の病に伴う体験を理解し、病とともに生きる方策について患者と共に考えることができる。 6) 医療システムの中で多職種との連携を通して、看護職の専門性と役割が理解できる。

表2 成人看護学実習（慢性期）の学び

カテゴリー	サブカテゴリー () はコード数
看護過程の展開の実際	慢性疾患患者の看護過程の展開を経験し、知識、技術を統合し看護実践への適用 (15) 受け持ち患者を複数持つことで1人1人違う看護展開 (3)
看護の実際	慢性疾患の特徴を踏まえた看護の実際 (6) 慢性疾患患者のケア、介入の実際 (20)
患者の理解	患者を理解し安心できる関わり (9) 生活者としての患者の変化のプロセス (9)
退院後の生活の支援	入院時から退院後の生活を見据えた看護 (23) 病院間の連携、病棟と外来、多職種連携により退院後の生活の支援 (13) 社会資源の活用による生活の支援 (5) 患者の健康状態、日常生活の変化に伴う家族の負担、対処、適応への支援 (10) 医療チーム、家族、患者間をつなぐ支援 (7)
セルフマネジメント支援	患者の思い、希望を尊重し望む生き方の実現の支援 (31) 患者は看護師と病気と共に生きる方策を考える支援 (13) 患者の立場に立ち必要かつ適切な情報を提供する支援 (9) 患者の軌跡、病気の進行、患者の状況を踏まえた看護 (17) 患者に寄り添い、強みを生かした支援 (17) ADLの維持、向上により生活の再構築に向けた支援 (14) 患者の生活、価値観をもとに自己管理の支援 (12) 患者のできているところに着目し、頑張りや認め肯定的な関わり (10) 自己効力感を高め、ポジティブに取り組める支援 (5) 模索しながら自己管理の継続のための支援 (9) 患者が、病気と向き合い、自分らしく生きるための支援 (17)
慢性の病気の影響	受容に対する葛藤や気持ちの揺らぎの影響 (16) 不確かな病みの軌跡が、不安、制約感をもたらす影響 (19) 慢性の病気が、患者に変容をもたらす影響 (7)
患者の支え	患者の言葉による思い (2) 家族との関係性 (2) 病気が患者の人生や生活の一部となること (6) 患者の周囲、家族による支え (6) 同じ疾患の患者同士による支え (2) 患者に思いの語り (2)

	n = 36				
要因	良い影響があった	少し良い影響があった	影響はなかった	少し悪い影響があった	悪い影響があった
グループダイナミクス	17(47.2)	17(47.2)	2(5.6)	0(0)	0(0)
受け持ち患者	31(86.1)	4(11.1)	1(2.8)	0(0)	0(0)
実習指導者	24(66.7)	11(30.6)	0(0)	0(0)	1(2.8)
看護師	18(50.0)	15(41.7)	0(0)	1(2.8)	2(5.6)
担当教員	21(58.3)	14(38.9)	1(2.8)	0(0)	0(0)
講義	11(30.6)	20(55.6)	5(13.9)	0(0)	0(0)
他領域の実習	30(83.3)	5(13.9)	1(2.8)	0(0)	0(0)
() 内は%					

Learning about “Living with Chronic Illness” in Adult Nursing Practice

Yuri TOUDOU*, Kazuko SUMIYOSHI*

* Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University

Abstract : The purpose of this study was to identify learning about "living with a chronic illness" after completion of the Adult Nursing Practicum (Chronic Phase) (hereafter referred to as the Practicum) and the factors that influence learning.

The subjects were the practice reports of 36 (90%) of the 40 students who completed the practicum and whose research cooperation was obtained, and their contents were analyzed qualitatively inductively. The study was conducted with the consent of the students after approval by the Ethics Board of the University (Approval No. 22-36). As a result, seven categories were extracted:

[Practical Development of the Nursing Process], [Practical Nursing Practice], [Understanding Patients], [Support for Life after Discharge], [Self-Management Support], [Impact of Chronic Illness], and [Patient Support]. The factors that students perceived as having a positive influence on their practical training were, in order, the patients they received, followed by other areas of practical training, with lectures having the least influence.

Keywords : Adult chronic nursing practice, Chronic disease nursing, Students' learning contents